

指扇小だより

教育目標 **やり抜く子の育成**

かしこく やさしく たくましく あたたかく

令和7年9月30日 第6号

さいたま市立指扇小学校

〒331-0078

さいたま市西区西大宮1丁目49-6

電話 048-623-0133 FAX 048-624-2200

<https://sashiogi-e.saitama-city.ed.jp>

『^{やぶ}藪の中』

校長 小松 伸弘

5年生が藍染めを体験しました。



連日の猛暑もようやく和らぎ、澄み渡る秋空の下で子どもたちが元気よく外遊びできる季節になりました。

土曜公開では多くの保護者の皆様に御来校いただき、ありがとうございました。子どもたちは少し緊張しながらもいつも以上に張り切って活動しており、改めて皆様の温かい眼差しが子どもたちの励みになっていると感じました。

話は変わりますが、芥川龍之介の『藪の中』という短編小説を御存知でしょうか。一つの事件を複数の人が語る話なのですが、それぞれの話が食い違い、次第に真実が分からなくなっていく。同じ出来事を経験しても、立場や思いによって見え方や記憶が変わる——そんな作品です。

学校で子どもたちの話を聞くとともに、同じように感じることもあります。私も職員から報告を受ける中で、「何が真実なのか分からない」と思うことが少なくありません。

子どもたちは時々、事実と違うことを言ったり、自分がしたことを言わなかったりすることがあります。けれどもそれは必ずしも誰かを困らせようという悪意からではなく、叱られたくない、恥ずかしいといった気持ちから生まれてくる行為のようです。これは発達の一つの段階であり、想像力や他者を意識する力が育ってきている証拠でもあります。

大人の問いかけで子どもの答えが変わってしまうこともあります。例えば、「こうだったんでしょう？」と念を押されると、子どもは言い出した手前、引くに引けなくなったり、何度も確認されることで、実際に記憶そのものが書き換えられたりしてしまうこともあります。

学校で子どもの話を聞ときは、第一に、正直に話してくれたことに感謝するとともに、発言を否定することなく受け止めるように意識しています。そうした経験が積み重なることによって子どもに「正直に話しても大丈夫」という気持ちが生まれ、正直さや責任感の育成につながると考えているからです。お家でも、お子さんが勇気を出して本当のことを話してくれたときには、叱る前にまず「言ってくれてありがとう」と受け止めていただければ幸いです。

一方で、「嫌だった」「悲しかった」といった子どもの気持ちは、その子にとっての真実です。「そんなことはない」と否定してしまうと「分かってもらえない」と感じてしまうため、まずは「そう感じたんだね」と受け止めてあげると、大きな安心につながると思います。学校でも、子どもの声を丁寧に聴き取り、事実を確かめながら指導につなげていきます。

秋が深まり、子どもたちは日々大きくなっています。ときに遠回りもしながら正直さや責任感を身に付けていくその姿を、御家庭とともに温かく見守っていきたいと思います。